

転位する観客

—啓蒙と革命のあいだで—

京都大学 富永茂樹

「穏和な習俗のあるところにはどこでも商業があり、商業があるところにはどこでも穏和な習俗がある」というモンテスキューは、その理由について『法の精神』の別のところで次のように述べる。「諸民族は互いに交流すればするほど、たやすく生活様式を変化させるようになる。なぜなら各人はいつそう他者の眺めるところとなり、個人のもつ特異な性格がいつそうよく見えてくるからである。」ここで「他者の眺めるところ」とあるもとの言葉は光景、見世物、演劇を意味する *spectacle* であることに注意しよう。つまり諸国民の相互の交流と穏和な習俗の成立という、啓蒙の世紀にふさわしいことからは、観客=観察者の存在を前提としているのである。

18世紀の啓蒙哲学はしかし、このモンテスキューの直後に大きな転回点を迎えるにいたる。1755年の11月にリスボンでは大震災が起きる。この報に接したヴォルテールは翌年になり動揺と悲嘆をまじえつつポープの楽観論に疑義を呈するが、これにたいして批判を加えるのが、このときすでに『人間不平等起源論』で文明化と人間の墮落を問題にしていたジャン=ジャック・ルソーであった。さらに1758年になってルソーは『百科全書』の項目「ジュネーヴ」でこの都市に劇場を設ける必要を説くダランベールに反駁し、演劇以上に意味のある人間の交流を実現するものとして、広場に立てた花を飾った杭の周囲に人民が集まる祭典を提唱する。そこでは観客自身が演劇の一部となり「各人が他者のなかに自分を見いだして自分を愛すること」で人間の結合関係は強化されるであろう。『法の精神』では観客たちのあいだに保たれていたある種の「距離」が『ダランベールへの手紙』では縮小し、彼らの相互の注視はその度合いを深めているのがわかる。

フランス革命が啓蒙哲学の帰結であるのか、それとも逸脱であるのかという原理にかかわる議論はおくとして、革命がはじまってまもなくの1791年、ル・シャブリエ、やがて各種の中間団体に次々と制限を加えあるいは廃止を進めるあのル・シャブリエが、劇場の設立の自由を認める法令を提案し可決させたとき、演劇に習俗の浄化という役割を求めるとともに、劇場が市民精神や祖国愛を教える「国民の偉大な学校」となることを期待していたことは興味深い。ここにはさらに革命が深まりいわゆる恐怖政治がその頂点に達したとき、ロベスピエールが提案する「最高存在の祭典」につながるものがある。「あらゆる情景のなかでもっとも壮大なのは終結した人民である」と恐怖政治の指導者のいう祭典が、ルソーの示した相互の距離をさらに縮小し注視の程度を深めることで、共和国の「徳」の共有にもとづいて強く結合する観客を受け継ぐものであった。

観客と演劇=見世物はこのようにして、啓蒙と革命の転変のなかでさまざまな様相を示してきた。この転変を経たあとになって登場するのが『諸学部の抗争』でカントの語る観客なのである。それはそれ自体が見世物でもあった事件の推移を眺めてきた、注視することの力学に目を向けないではいられなかった観客、注視することを注視した、その意味で二重の観客であった。そこにはまた、かつて議論することをおして理性の公的な使用を展開し、世界市民社会へと向かおうとしていた公衆（「世界市民社会の視点から見た普遍史の観念」、「啓蒙とはなにか」）があらためて姿を現しているのはいうまでもない。

文献：富永茂樹、2005。『理性の使用—ひととはどのようにして市民となるのか』みすず書房。